

二人のドロテア

——ドイツにおける最初の女性博士たち——

屋 敷 二 郎

はじめに

本稿で取り上げる二人の女性に筆者が関心を持つようになったそもそものきっかけは、ケルン大学で在外研究を行っていた折に、たまたま「女性の学業は大変！」と題する企画展が同大学図書館にて開催されたことであった。そのとき筆者の眼をひいたのは、一通の学位記である。そこには、概ね次のようなことが記されていた。

極めて慈悲深きわれらが君主、プロイセン王フリードリヒ陛下の權威により、恩寵ある医学部の決定に基づき、ハレ大学の光輝ある学長代理にして医学・自然哲学教授ミヒャエル・アルベルティのもと、学

位授与権者たる医学部長・正教授ヨハンネス・ユンカーは、医学の学識と経験をすぐれて備えた婦人、クヴェードリンブルクのドロテア・クリステイアーネ・エルクスレーベン、旧姓レポーリンに、医学における最高の名譽と博士の学位を、一七五四年六月一二日に、法の定めるところにより授与した。

たまたまその頃フリードリヒ大王の啓蒙絶対主義をテーマに学位論文の準備を進めていた筆者は、たちまち興味をそそられてしまった。女嫌い知られ、女性蔑視の傾向がつとに指摘されてきたフリードリヒが、ドイツで最初の女性博士の誕生に関与していた？ 意外な発見にひかれて調べるにつけ、筆者はしだいにこの魅力的な女

性について、研究者として本気で取り組んでみたいと思うようになった。実際、しばらくの間はドイツの研究者仲間たちがあきれるほど史料集めに熱中し、新しい事実を知るたびに彼らに喧伝するというありさまであった。挙句の果てには、エルクスレーベンの故郷であるハルツの美しい小都市クヴェードリンブルクを訪れもした。クロップシュトック博物館が改修工事のため彼女についての展示が見られないと知っていたにもかかわらず、である。

そのような折、いみじくもハレ大学で開催された若手法史学者フォーラムで知り合ったドイツ人研究者と、ちよっとした議論になった。彼女の言うには、ドイツで最初の女性博士は著名な歴史学者アウグスト・シュレーツァーの娘であるはずだ、というのである。彼女が見たというゲティンゲンの市立博物館では、筆者が訪れた際も確かに、郷土愛ゆえなのか「ドロテア・シュレーツァーは、一七八七年九月一七日にゲティンゲン大学において、ドイツで初めて女性として博士号を授与された」旨の展示がなされていた。むろんこれは誤りであり、正確には「哲学博士号を」と記すべきだろう。ともあれ、そ

れ以後、筆者はシュレーツァーについても調査を始めたのであった。

以上のようなまったく個人的な経緯を学術論文にくだしく書き記すのは、率直に言って気がひけるものである。しかし、筆者が本稿であえてその禁を破ったのは、初めて学問に接する読者のために、研究テーマとの出会いというものについて示唆を与えようと考えたからである。また同時に、本稿のテーマそれ自体も「学問への招待」に相応しいものを選んだつもりである。「ドロテア」というファーストネームを同じくする二人の女性が、一八世紀のドイツにおいて相次いで博士号を取得し、ともにバイオニアとして高等教育を受けようとする後々の女性たちに勇気を与えたこと、にもかかわらず実に対照的な性格をもち、対照的な人生を歩んだことを、本稿では紹介したいと思う。彼女たちの生涯をたどりながら、これから始まる自分と学問との関係について考えるよすがとしてもらえれば幸いである。それでは本題に入ることにしよう。

一 ドロテア・エルクスレーベン

ドロテアは、世界遺産にも指定された美しい木組みの街並みで知られるハルツの大都市クヴェードリンブルクで、一七一五年一月一日に生を享けた。父のクリスティアン・ポリカルプ・レポーリン（一六八九—一七四七年）は牧師の息子に生まれ、同地の開業医であったが、進取の気風に富み、多数の著作も発表していた。母のアンナ・ゾフィア（一六八〇—一七五七年）も夫と同じく牧師の娘であった。ドロテアは、このような両親のもと、裕福とはいえないが、敬虔な信仰と学問への熱意にあふれる家庭に生まれ育った。

クヴェードリンブルクという都市の誕生に大きな役割を果たしたのは、二人の女性、いわゆる「二人のマティルダ」である。太后マティルダは、彼女が夫とともにこよなく愛したこの地に、高位貴族の娘の教育と扶養のために女子修道院を設立した（九三六年）。その際、息子のオットー一世（初代神聖ローマ皇帝）は、同修道院に豊かな所領と聖俗権力からの独立を与えた。これがクヴェードリンブルクの繁栄の礎であった。修道院は院長選出権をもち、皇帝にのみ属するとされた。院長職については当然ながら女性であるが、院長はやがて帝国等族

として帝国議会に議席と投票権を持つようになった。初代の院長となったのは、太后の孫娘にあたる、当時まだ一一歳であったマティルダである（九六六年）。彼女は、九九八年に熱病で死去するまでの間、修道院と都市の発展に尽力した。その間、九七三年には帝国議会が開催され、九四四年には市場開催権・貨幣鑄造権・関税徴収権を付与されるなど、クヴェードリンブルクは最初の繁栄を謳歌することになった。

この最初の繁栄期がすぎた後、クヴェードリンブルクは一三三八年にハルバーシュタットの宗主権に服することになり、また一五三九年には宗教改革を受けて福音派の世俗領となった。さらに、一六九八年には宗主権がブランデンブルク・プロイセンに移譲された。こうした政治的状況の変化とともに諸々の権限争いが生じ、都市の相対的地位は低下していったのだが、それにもかかわらず、修道院とその院長は都市の文化や政治において重要な存在であり続けた。「二人のマティルダ」を始め、都市の象徴的支配者が代々女性であったことは、あるいは女性の能力を率直に評価するような風土を育んでいたのかも知れない。

ドロテアが学問に親しむようになったのは、ほんの偶然によるものであった。病弱であった彼女は幼少時から書物に親しみ、父親が彼女の兄弟に医学や自然科学を教えるのを一緒に聞いていたのである。やがて彼女は兄とともに、父の治療現場に同伴して臨床例を学んだり、時には父の代診を任せられたりようになった。父親が熱心に収集していた医学書を読むことで、彼女はいながらにして最新の医学にも通暁していった。やがて、その知識はクヴェードリンブルクの学識者たちの注目を集めるようになった。

ドロテアの能力に注目した一人が、中等学校の校長エックハルトである。彼は、ドロテアのために特別にラテン語の課題を作成し(共学は認められていなかった)、ドロテアに学位を目指すように薦めた。当時、啓蒙主義の精神が普及するなか、女性の知的世界への進出が始まりつつあった。エックハルトが彼女に薦めた書物のなかには、アンナ・マリア・シューアマンの『小論集』(一六四八年)があった。彼女は、一六三六年に設立されたレイデン大学で「カーテン越しに」聴講を認められたことでも知られる。同書には女性の学問的能力に

関する論文も収録されており、この論文がドロテアに刺激を与えたことは疑いない。また、ラーウラ・バッシが一七三二年にポロニヤ大学で哲学博士号を取得したニュースもまた、ドロテアにとって大きな励みとなったであろう。バッシはその後、早くから女性に門戸が開かれていた同大学において、一七三三年には哲学、一七七六年には実験物理学の講座を与えられたとされる。こうしてドロテアは、ハレ大学で医学を学び、博士号を取得して開業医になる、という夢を抱くようになった。

機会は思いもかけぬ形で訪れた。一七四〇年、フリードリヒ二世(大王)の即位に伴なう服従宣誓である。一月二六日、父クリスティアンは自著を国王とホーエンツォレルン家に捧げ、ドロテアはフリードリヒを称えるフランス語の頌詩を朗読し、使節団に請願書を提出した。それは、兄クリスティアンの兵役免除と、彼女自身のハレ大学医学部への入学許可および奨学金の支給を求めたものであった。

ところがその直後、レポーン家は危機的状況に追い込まれることになった。一二月一日付の通達により、ハレ大学の学生は兵役を免除されることになっていた。そ

れにもかかわらず、連隊長の許可をえて復学していた兄クリスティアンに対して、召集がなされたのである。大学評議員会はこれに抗議し、アルベルティ、ユンカーの両教授は鑑定を連隊に送付した。しかし、連隊側はこれに屈せずクリスティアンを逃亡兵として排列撻刑に処すると威嚇したため、彼はとうとうザクセン侯国に逃亡してしまった。そこで連隊は、今度は父クリスティアンに対し、八日以内に逃亡中の長男か、商人見習いをしていた病弱な次男を就役させるよう要求した。こうして次兄ヨハンネスとともに、父クリスティアンもまた逃亡を余儀なくされ、母と娘は糊口なく残されてしまったのである。

そのとき、一家を救ったのが、先のドロテアの請願書であった。使節団の好意的な書状が添えられた請願書に眼を通したフリードリヒは、「このような例は、女性に關しては、特にドイツでは非常に稀であり、ゆえにこのケースはこの者に少なからぬ榮譽となるであろう」(一七四一年三月二〇日)として、枢密軍事顧問官ミューリウスに兄クリスティアンの学業継続を認めるよう連隊に指示を下させ、さらに宗務局に対してドロテアの

ハレ大学入学・学費免除・奨学金支給を許可するよう指示したのである。啓蒙主義の時代とはいえ、当時まだ外国語を習得する女性は貴族や上級市民に限られており、まして古典語や自然科学に通曉した女性は非常に稀であった。それゆえ、フリードリヒが彼女に注目したのも当然といえよう。こうして彼は、四月一五日付で「推薦されたレポーリンが学位取得の件でさらに申し出たならば、ただちにハレ大学医学部に推挙されるべし」という、まさに画期的な特許状を与えたのである。兄クリスティアンの兵役問題もまた、父による再度の請願を受けて、五月一〇日にフリードリヒの指令が下され、解決することになった。兄クリスティアンは学業を修了した後、近隣の都市で開業医となった。

いまやドロテアの学業を妨げるものは何もないはずであった。ところが、彼女は結局ハレ大学で学ぶことはなかった。一七四二年に、ニコライ教会の牧師ヨーハン・クリスティアン・エルクスレーベン(一六九七—一七五九年)と結婚したからである。彼は前年に妻を亡くし、五人の子どもをかかえて鰥夫となっていた。二人の間にはさらに四人の子どもが生まれることになるのだが、

どだいこのような環境では大学で学ぶことなど不可能であった。しかし、ドロテアは医学の道をあきらめはしなかった。夫が重病を患った際には、妻以外の医者を買ひ彼に献身的な医療を施し、みごと回復させた。このことが評判となって、慎重で無私で人間愛あふれる医療を求める人々が彼女のもとを訪れるようになり、とくに貧民たちから絶大な支持をえることになった。彼女は、家事に育児、そして牧師夫人としての職務に追われながらも、その合間をぬって医学の新理論を独学し、当初は父の助けを借りつつも、その死後(一七四七年)は独力で人々に医療を施した。

ところで、こうした職業と家庭との両立は、ドロテアが独身時代から考えてきたことの実践であった。二二三歳のとき、女性が学問をすることに對する無理解や偏見に悩んだ彼女は、自分の考えを整理するために『女性を学問から遠ざける原因の根本的探求』をひそかに書き綴った。この論文は、女性が学問をすることの効用を説きつつ、それを現実妨げている経済的・社会的・道德的な仕組みについて明らかにしたものであり、彼女の大学で学びたいという熱意の現われといえよう。この興味深

い論考の詳しい内容については別の機会に取り上げることにするが、男性側からの軽蔑や女性の間での嫉妬など、ドロテアの批判には現代でもなお妥当するものがある。この論文においてドロテアは、女性の知的能力を主張し、結婚と学問、家庭と職業が両立可能であることを力説した。敬虔な彼女は考えもしなかったであろうが、結果的に、ヨーハンとの結婚は彼女自身の理論の正当性を立証するいわば絶好の機会になった。

この論文は、やがて父クリスティアンの知るところとなった。かつて教育論を出版したこともあるクリスティアンはただちにその価値を認め、自ら序文を付して一七四二年にベルリンで出版させた。当時の書評などを読む限りでは、かなり好意的な評価を受けたようである。もっとも、売れ行きの方は芳しくなかった。また、一七四九年にはフランクフルトとライプツィヒで『女性の学問に関する理性的考察』と題する海賊版が出されたが、そこにはドロテアの名前もクリスティアンの序文もなかった。ドロテアはこのことに大いに憤慨して、海賊版の書評を掲載した新聞に抗議文を寄稿している。

その間、ドロテアの医療活動はクヴェードリンブル

クで着実に地歩を固めていった。このことは現代の常識からすると奇異に思えるが、当時はまだ医師による医療独占が確立していなかったのである。ところが、事態は急変する。一七五三年二月五日、ドロテアは三人の軍医とともに、クヴェードリンブルクで開業する三人の医師から素人医療行為の禁止を求めて提訴されたのである。軍医たちの医療水準がどれほどのものかは不詳であるが、少なくともドロテアに関しては正規の医師に劣らぬ医療を施していたことは疑いなく、おそらく嫉妬心からの提訴であったと思われる。三医師の訴状には、①被告は正規の医師の営業を妨げており、原告三名から患者を奪っている、②公然と往診を行っている、③図々しくも患者に「女医先生 (Frau Doktorin)」と呼ばせている、④ある女性を不手際により誤って死亡させた、という四つの論拠が示されていた。

これに対して、ドロテアは二月二日の抗弁書において、次のように反論した。①現在まで学位を取得していないのは事実だが、それは結婚・出産・夫の重病・父の死により遅延しただけであり、妊娠中の第四子を出産後ただちに、一七四一年四月一五日の特許状に基づいて、

ハレ大学に学位請求が可能である。②確かにある患者を死なせはしたが、手を尽くした結果であって、一件の死亡にのみ言及し多くの成功例に言及しないのは不当である。また、三医師にも死亡例があるのに責任は問われていない。③患者の家には求められて往診しているにすぎない。逆に原告のうちグラスホフ医師は、父クリスティアンの死に際して、頼みもしないのに訪れて有害な医療を施した。④「女医先生」との呼び名は患者に強制したわけではなく、彼らがそう呼ぶのを受け入れたにすぎない。⑤自分は貧民しか治療していないので、三医師の営業の妨げになるはずがない。⑥仮に原告がこの抗弁に満足できず、被告の学位取得を待てないというのであれば、裁判官立会いのもと三医師による試験を受ける用意がある、と。なお、この抗弁書でドロテアはすでに学位論文の題目も示しており、この紛争以前から学位取得の準備を進めていたことがうかがわれる。

三医師による三月六日の再抗弁書はかなり感情的なものであり、亡父クリスティアンの医学識を誹謗するなど、ほとんど読むに耐えない。唯一言及に値するのは、学位取得資格に関する部分であろう。①被告は確かに独身時

代に国王の特許状を付与されている。しかし、兄とともに赴いたハレ大学で、被告は結局学位を取得できなかった。②そもそも学位の取得には皇帝の特権が必要であるが、この特権は男性のみを対象としており、ドイツで女性が学位を取得した例はない。③イタリアでは確かにラーウラ・バッシが学位を取得したが、彼女は独身であり、しかも教皇が特例として勅許を下している。④いずれにせよ既婚女性には許されない、というのである。その後の記録をみると、明らかな事実誤認である①はもちろんのこと、④の主張もまるで相手にされなかったようである。他方、②③はそれなりに問題視されたようで、医学部長ユンカーはドロテアの学位論文に序文を付するにあたり、皇帝特権は女性の学位取得を積極的に排除するものではない等々、女性への学位授与の正当性を論じている。

この段階でおそらく趨勢を見極めていた裁判官シェラースハイムは、三月一〇日、ドロテアに対して三ヶ月以内に学位審査を受けるように勧告した。ところが、ドロテアは出産に伴なって体調を崩してしまい、やむなくさらに三ヶ月の期限延長を申立てることを余儀なくさ

れた(結局、六ヶ月の延長が認められた)。翌一七五四年一月六日、ついにドロテアは博士論文『迅速かつ快適ゆえにしばしば不確実でもある治療について』を提出した。その際、ドロテアは、受験費用の軽減もあわせて請願している。国王フリードリヒは、特に不都合のない限り受験を認めるように、ハレ大学医学部に対して通達(三月六日)を行い、これを受けて、医学部評議会は受験の許可を決定(五月三日)、またシェラースハイムの尽力もあって、受験費用の軽減も認められた。

五月六日、医学部長ユンカーをはじめとする教授陣により、「法令および慣習に則って」ドロテアの口述試験が行われた。試験は二時間に及んだが、ドロテアはあらゆる医学分野にわたる質問に対して流麗なラテン語で完璧に解答し、みごと合格を果たした。ハレ大学医学部はこの輝かしい結果を国王に報告するとともに、博士号を授与してよいか念のために国王の意向を打診した。フリードリヒはこの報告を受けるとただちに自筆で通達を起草し、学位授与は「非常に喜ばしい」と回答し、正規の学位を授与するように指示した(五月一八日)。かくて、一七五四年六月一二日、ドロテアは学位宣誓を

行い、女性としてドイツで初めて博士号を取得した。ときに三八歳であった。それは、ドイツで最初の女医が誕生した瞬間でもあった。

学位記の授与は医学部長邸で行われたが、博士号取得につきものの祝賀パーティーは開かれなかったようである。祝賀パーティーの費用は受験者本人が負担するのが通例であったから、おそらく受験費用軽減措置の一つであったのだろう。ドクターは、他学部の教授や多数の学生も出席するなか、授与式においてもラテン語で謝辞を披露しており、その様子は新聞でも報じられた。なお、ラテン語で著された学位論文はハレとマグデブルクで出版され、さらに翌年にはドクター自身によるドイツ語訳がハレで出版されている。

その後、ドクターは以前と同じくクヴェードリンブルクで開業を続け、貧民はもちろんのこと、特に女性や子どもの医療に尽力したとされる。また、当時のクヴェードリンブルク女子修道院長は国王フリードリヒの実妹アンナ・アマリアであったが、ドクターは彼女の侍医も拝命することになった。

一七六二年六月一三日、ドクターはこの世を去った。

学位取得からまだほんの八年目の出来事であった。当時の『ベルリン新聞』には次のような死亡記事が掲載された。

クヴェードリンブルクは、高い学識と豊かな経験を持つ比稀な女性、医学博士ドクター・クリスティアーネ・エルクスレーベン、旧姓レポールの早すぎし死を悼む。彼女は、高潔な性格と偽らざる敬神のみならず、その優れた学識で知られる女性として、韻文散文を問わず、ドイツ語、フランス語、ラテン語のいずれも軽々と誤りなく著し、一七五四年六月一二日にハレ大学にて博士号を授与された。倦むことなく貧しき隣人の苦しみを和らげ、名譽と幸福と神の祝福をもって臨床医学に従事した。この比稀な女性が人生のあらゆる出来事に際して勇敢なりしことは、その死に臨んでも示された。彼女は恐れず死と向きあい、死の到来を子どもたちに告げ、家事の整理を済ませ、六月一三日、胸の危険な疾患による失血により、その輝かしい人生の四七歳にして、座したまま安らかに死去した。神がその寿命を二倍に

されしならば!

二 ドロテア・シュレーツァー

もう一人のドロテアが生を享けたのは、その八年後の一七七〇年八月一〇日のことである。父のアウグスト・ルートヴィヒ・シュレーツァー(一七三五一—一八〇九年)は、ゲティンゲン大学の富裕な歴史学教授で、当時のヨーロッパ中の君主たちから恐れられたジャーナリストでもあった。その権威は、かのマリア・テレージアがある案件の処理に際して「許可できぬ。そんなことをしたらシュレーツァーに何を言われるか」と述べたほどであった。母のカロリーネ・フリーデリーケ(一七五三—一八〇八年)は同大学医学部教授の娘で、六歳から九歳までアウグストがその家庭教師であった。ドロテアの生家は大学から「ほんの六〇歩のところ」で、学生や教授たちが頻繁に訪れ、講義も行われたという。アウグストは厳格な父親であるとともに、身分や財産ではなく教養を政治参加の資格と考える啓蒙主義者であった。このようにドロテアは、裕福だが儉約を重んじ、感情を抑制して理性に重きをおく、一つの典型的な教養市民の

家庭に生まれ育った。

後にグリム兄弟が活躍したことで知られるゲティンゲンは、クヴェードリンブルクとは山脈を挟んで反対側に位置する、ハルツの古都である。九五三年まで記録を遡ることができるこの都市に飛躍的な発展の契機を与えたのは、大学の設立であった。一七三三年、神聖ローマ皇帝カール六世は特許状を与え、同地に大学を設立することを許可した(実際の設立は一七三七年)。これを受けて、ブラウンシュヴァイクホルリューネブルク選帝侯ゲオルク二世(英国王ジョージ二世)は、枢密顧問官ミュンヒハウゼンを大学設立の責任者に任命した。ミュンヒハウゼンは、自らも学んだハレ大学をモデルとし、その啓蒙主義的かつ実用主義的な大学理念をさらに徹底して追求した。この実用主義が受けて、ゲティンゲン大学はたちまちドイツを代表する大学へと発展することになった。その看板教授の一人であったミヒャエーリスは、一七四七年に女子大学の設立を提言している。それによると、講義課目として自然科学、詩学および雄弁術、天文学、国法学、解剖学、生理学、病理学、養生学、治療学、地理学、歴史学を設けるべきだという。興味深いことに、

そこでは、明らかにドロテア・エルクスレーベンを指すと思われる匿名の人物が、講師陣の筆頭に挙げられている。ところで、この提言は、奇妙なことにゲオルク二世ではなくプロイセン国王フリードリヒ二世に対して行われ、しかも実現には至らなかつた。しかし、このような提言をなしたミヒャエリスがシュレーツァーの師であり、その娘ルイーゼがドロテアの親しい友人であったことは、注目に値するであろう。

一八世紀後半のドイツにおいては、ルソーが『エミール』において示した個人主義的な新しい市民生活像が普及するとともに、その「優しく男性を支える女性」という観念もまた急速に広がっていた。こうしたロマン主義的風潮に啓蒙主義者アウグスト・シュレーツァーは強く反発し、ルソーの影響を受けた教育学者バゼドウと激しく論争した。アウグストは、その際に自説の証明手段として娘のドロテアに眼をつけた。彼はドロテアの教育と平行して教育書を何冊も出版し、娘をいわば教育実験の対象として取り扱ったのである。父アウグストは、男女の学問的能力に区別を設けなかつた点では非常に進歩的であったが、その社会的役割については伝統的な観

念の持ち主であった。彼が娘のために描いた将来像は、男性に伍して社会的に活躍する職業婦人ではなく、学問的教養を樂しみ、そこに老後の慰めを見出す主婦であった。

ドロテアの才能は傑出したものであった。彼女が習得した言語は実に一ヶ国語にも及ぶ。彼女が五歳のときに数学を教えたケストナー教授は、「まだろくに丸も描けないのにユークリッドの最初の二巻を理解している」と評している。一〇歳からはいわば彼女の専門学科となる鉱山学・鉱物学を学び、グメーリオン教授の指導のもとハルツ山脈で六週間の鉱山実習も体験した。自宅で行われた父アウグストの歴史学の講義は、ドロテアも学生たちと一緒に聴講したという。また、アウグストは旅行を理論と実践を一致させるものとして非常に重視した。ドロテアは六歳から父とともに各地を旅行し、一一歳でローマを訪れた際には教皇に拝謁を許された。なお、ドロテアは、一七八三年から八七年の間に雑誌に三編の紀行文を寄稿している。

ゲティンゲン大学が一七八七年に設立五〇周年を迎えたとき、記念式典においてドロテアに学位を授与する

ことは、もはや当然の成り行きであった。一七歳のドロテアは、晴れた八月の夕べに、髪に花をさし花嫁のような白いドレスで口述試験を受験し、数学・鉱山学・建築術・歴史の諸分野にわたる質問に完璧に解答したという。学位宣誓は翌二六日に行われた。しかし、ドロテアは、女性であることを理由に、「教壇にたった暁には、真理を求め、神と信仰に対して謙虚に畏敬をもって哲学する」という宣誓書に自分で署名することが認められなかった。学位記の授与は、大学教会の聖堂で九月一七日に行われた。その際にも、神学・法学・医学部の学位授与の後、哲学部の学位取得者一三名の筆頭で名前を読み上げられたドロテアは、式典に列席することが許されず、図書館の出窓から自身の学位授与を覗いていたという。

学位記には、概ね次のようなことが記されている。

皇帝の全権により、グレートブリテン国王にしてブラウンシュヴァイク＝リュネブルク選帝侯ゲオルク三世の治下、学長代理にして外科医学教授アウグスト・ゴトリープ・リヒターのもと、哲学部長・正

教授ヨハンネス・ダーフィット・ミヒャエリスは、哲学における最高の名譽を、極めて学識ある未婚女性ドロテア・シュレーツァーに、學術試験の後、大学設立五〇周年式典を期に、一七八七年九月一七日に授与した。

ドロテアの哲学博士号取得は、アメリカでも報道がなされるなど、大いに反響を呼んだ。当時、ドロテアとの会見記がさかんに公表され、彼女の肖像画が人気を博したという。シュトラースブルク大学は同年一〇月に彼女の名譽学生登録を行い、イエナ大学は一二月に彼女をラテン協会会員に選出した。学問的栄光の絶頂にあつたドロテアは、父の著書『ロシア貨幣・鉱山史』（一七九一年）の執筆にも協力しているが、同書に用いられた膨大な資料の翻訳や換算などはもっぱら彼女の業績だとされる。

いまやドロテアを称賛することは、自分の寛容さと進歩性を示す格好の手段となった。しかし、彼女が人々に愛された理由は、その学問的才能だけではなかった。自己主張に乏しく、父アウグストのいう「女性の本来の

仕事」に熟達していたドロテアは、「学識はあるがまともな女性」であり、安心できる存在であった。ちなみに、ドロテアの刺繍の腕前はベルリン芸術アカデミー名譽会員に選ばれるほどであり、ピアノの腕前は八歳からコンサートで演奏するほどであったという。

ドロテアの人生の転機となったのは、一七九一年の北ドイツ旅行である。彼女はリューブクで、参事会員や市長を何人も輩出した名門の商人マテウス・ロツデ（一七五四—一八二五年）と知り合った。マテウスは、一七八三年に父親から大商會を相続し、一七八五年に鰥夫となった後は、亡妻の莫大な遺産を相続した三人の子どもが成人するまでの財産管理によって、指折りの資産家となっていた。また彼は、一七八九年に参事会員に選出され、ハンザ都市リューブクの政治・財政に大きな影響力を行使する有力者となった。財産が娘の幸福を保証すると考えた父アウグストは、マテウスとの縁談を進めるにあたり、一六歳の年齢差を考慮して、彼に莫大な金額の生命保険に加入することを要求している。翌一七九二年、二人はゲティンゲンで結婚、リューブクでの生活を始めた。

当初の結婚生活は円満で、ドロテアは三人の子どもを相次いで出産している。彼女のサロンはリューブクの社交の中心となり、多くの著名人が訪れた。さらに、一八〇一年には、外交使節に加わったマテウスとともにパリに赴いたドロテアは、ナポレオンの招待を受け、女性としてはじめてアカデミー・フランセーズに列席を果たした。一八〇三年にはマテウスが皇帝フランツ二世から帝国男爵に叙爵、父アウグストも翌年にロシア皇帝アレクサンデルから世襲貴族に叙爵された。

しかし、幸福は長く続かなかつた。

ナポレオン戦争の勃発により、リューブクはフランス軍の占領下におかれた。同市は大陸封鎖令の影響で未曾有の不況に見舞われ、一八〇八年から一一年の間に百近い商會が破産した。市長に選出されていたマテウスは、都市財政を支えるべくリューブク市の銀行家となって信用貸しを重ねた結果、自身の実際の財政状況を見失い、一八一〇年九月一四日、ついに破産してしまった。直接の原因は、当然予想できたはずなのだが、子どもたちが成人して亡妻の遺産管理が彼の手を離れ、資金繰りに支障をきたしたのだという。

ドロテアは、破産の原因はマテウススの浪費にあると考えた。その根底には、伝統的名門市民層のマテウスと、新興教養市民層のドロテアとの、価値観や金銭感覚の違いがあった。この亀裂は、サロンの常連であった元フランス将校で詩人のヴィレル(一七六五—一八一五年)との関係によって、決定的なものとなった。マテウスが社交には贅沢を惜しまなかったのに、子どもは単なる都市貴族的な価値観だけによるものではないのかも知れない。

ともあれ、ドロテアは三人の子どもとともにゲティンゲンへ移り、やがてヴィレルもその後を追った。この間、ドロテアは一八〇八年に母を、一八一〇年に父を相次いで失った。父を亡くす前年、ドロテアの心境を窺わせる意味深長な出来事がある。彼女は、父の名前アウグスト・ルートヴィヒをミドルネームに持つ甥ネスツールに、よりによって父の仇敵バゼドウの教科書を贈ったのである。ドロテアは「学識ある女性」であることに虚しさを感じていたのだろうか。いずれにせよ、彼女はいまや経済的につつましい生活を余儀なくされた。

否、全財産を失う危険すらあった。

当時のリューベクの法慣習では、競売に際し、当該の婚姻による子を持つ妻は、その全財産をもって夫の債務の共同責任を負わねばならなかった。他方、当該の婚姻による子のない妻は、持参金・特有財産・相続期待権については責任を免れることができた。したがって、このままでは、ドロテアは、すでに多額を払い込んである生命保険も、父アウグストの遺産も、全て失ってしまうことになる。そこで、ヴィレルは、ドロテアを救うべく、文筆による抵抗を開始した。彼によれば、当該の法慣習は「自然法および自然的衡平の原則に反する」。すなわち、①根拠となる改訂リューベク都市法典(一五八六年)第一編第五章第七条には「債務のゆえに逃亡した者」とあり、本件のように債務者が逃亡していない場合には適用できない。②性質上この条文は例外規定であり、狭く解されねばならない。③本条文の目的は帰還を促すための心理的強制であり、子のない場合の免除規定は、そうした妻が逃亡債務者から見捨てられがちであるがゆえの人的措置である。それゆえ、「この純粋な本来の意味が回復されねばならない」。

このヴィレルルの解釈論は、まさに時代精神の反映といえる。というのも、この時期はナポレオン法典の成立期（一八〇四年の民法典、一八〇七年の商法典など）にあたり、体系性・無欠缺性を標榜する近代法理念が確立しつつあったからである。他方、改訂リュベク都市法典は、中世法源一般に共通する特徴として、その本質において判決事例集に他ならず、当然のごとく欠缺を含むものであった。ヴィレルルは、無欠缺性を不可欠の前提とするはずの反対解釈を、中世法源に強引にあてはめたわけである。この論争は反響を呼び、当時生まれつつあったドイツ私法学で盛んに議論されることになった。とはいえ、問題の競売において、ヴィレルルの主張はさしたる成果をもたらさなかった。

結局、遺産を相続した亡妻の子どもたちが一定の負担に応じたのか、債権者との間に和解が成立し、ドロテアの手元には生命保険証書が残った。ドロテアはいまや家計を維持するのが精一杯で、高額な保険料や子どもの教育費などは、弟のカールが援助したようである。マテウスはもはや落伍者として打ちひしがれ、家計の重荷にしかならなかった。

不幸はなおも続いた。ヴィレルルは一八一一年からゲティンゲン大学フランス文学教授の職にあったのだが、ナポレオン体制の崩壊とともに「元フランス将校」として公職追放の憂き目にあった（一八一四年）。翌年、彼が失意のうちに死去したことは、ドロテアにとって大きな痛手となった。さらに追い討ちをかけるように、長女アウグステは長患いの後一八二〇年に死去、ついで一八二三年には息子アウグスト・ルートヴィヒも肺結核で死去した。この頃、マテウスも病気に見舞われ、ドロテア自身もほとんど眼が見えなくなつたという。翌年、残る娘ドロテアも健康を害したため、母ドロテアは夫と娘を連れて南仏のマルセイユまで保養に赴いた。

幸いにして娘は健康を取り戻した。そして、ドロテアは、あるフランス人の鰥夫とこの地で出会い、結婚の約束をしている。ドイツでのしがらみを捨てて、一人だけ残った娘とともにフランスで暮らす—そんなささやかな夢を親しい親類や友人に伝えたとき、彼が重婚者であることが判明した。ドロテアはこの痛手から立ち直ることはなかった。

墓碑銘にはこう記されている。

ドロテア・フォン・ロッデ、旧姓シュレーツァー、一七七〇年八月一〇日ゲティンゲンに生まれ、一八二五年七月一二日アヴィニョンに死す。一七歳で哲
学博士号の榮譽を授与。

勇敢な氣質、天賦の才、それは汝の生ける時の支えなりし。そは汝を学識の野にて導き、汝に憂慮を背負う勇氣を教えし。まこと、女神が汝の生誕にて微笑みしように、汝は女性の優美なる徳を欠くことなかりし。汝の死を長く耐えずして、夫は汝の後を急ぎて死にいたり、魂と魂で結ばれし。然れど汝の懷にて愛しき年月をすごせし娘は、このち汝なくして、嘆きとともに残されし。不幸の極みし娘の悲嘆にて、母なる汝の墓をもはや涙で濡らさぬと思われん。

おわりに

ドロテア・エルクスレーベンは、決して恵まれたとはいいかねる環境のなかで、めぐってきた数少ないチャンスをおわがものとした。彼女は愛する家族に囲まれ、地元の人々から敬愛され、子どもたちの何人かは著名な学

者になった。人生論風にまとめるならば、彼女は幸福な人生を送ったということになるのかもしれない。敬虔な信仰をもった彼女のことであるから、おそらく日々の幸福を神に感謝していたのだろう。しかし、彼女はついに大学で学ぶことなく、学位を得るまでの長く遠い道のりを考えれば、ほんの少しの間しか正規の医者として活動することができなかった。まして、若き日の彼女が『探求』で指摘した問題は、今日それらがなおアクチュアルであることが示しているように、彼女の学位取得によって何ら変わることがなかった。

ドロテア・シュレーツァーは、後の時代の女性たち、否、多くの男性たちと比べても、はるかに恵まれた環境で学問と出会うことができた。学者や学生たちが頻繁に出入りする家で、ヨーロッパ中にその学識を誇った父親が最高の教育を施そうとしたのだから。同じ時代を生きる他の女性たちを後目に、彼女は自らの並外れた才能を思う存分開花させる喜びを味わったことだろう。時は啓蒙主義の時代、あとほんの少しの幸運さえあれば、あふれる才能と有力な父親をもつ彼女なら、男性に伍して大学で学び、ドイツで最初の女性教授となることも夢では

なかったかも知れない。しかし、彼女はしょせん父親の実験道具にすぎなかった。その意志に抗するには、父はあまりに専制的であり、彼女はあまりに従順であった。彼女は、学位論文すら著すことなく学位を取得し、うたかたの栄光の後、悲劇的な運命にひたすら翻弄されつづけた。

読者は、二人のドロテアの人生が決して英雄的なものではなかったことに、あるいは失望したかもしれない。彼女たちはそれぞれ困難な人生を歩んではいるが、困難な道を自力で切り開いていく女性というイメージには、二人ともそぐわない。それにもかかわらず、彼女たちの博士号取得は、高等教育を受けようとする後々の女性を勇気づけ、その輝かしい目標となった。このことは、歴史の皮肉のようにも思われるが、看過しえない事実である。それをふまえた上で、筆者はこう問いかけてみたい。二人のドロテアにとって、けっきょく学問とは何だったのだろうか。

主要参考文献

本稿では、学問への招待というその性格に鑑み、あえて

註を全て省略し、参考文献も特に重要なものだけを挙げることにする。

冒頭で紹介したケルン大学図書館の企画展は、Irene Frauchen: "Ja, das Studium der Weiber ist schwer!" Studentinnen und Dozentinnen an der Kölner Universität bis 1933, Katalog zur Ausstellung in der Universitäts- und Stadtbibliothek Köln, 28. April-10. Juni 1995 (こまごまのり)。学問を志した最初の女性たちについては、Renate Feyl: Der lautlose Aufbruch, Frauen in der Wissenschaft, Köln, 1994 (445) Londa Schiebinger: The Mind Has No Sex? Women in the Origins of Modern Science, Cambridge, 1989 (概観を与えてくれる)。ニコルマン・ホルクムレーンクの生涯については、Heinz Böhm: Dorothea Christiane Erleben, Ihr Leben und Werke, Quedlinburg, 1985 (他、訴訟記録など関連史料については Werner Fischer-Defoy: Die Promotion der ersten deutschen Ärztin, Dorothea Christiana Erleben, und ihre Vorgeschichte, in: Archiv f. Geschichte d. Medizin, Bd. 4, 1911, S. 440-461 を参照のこと)。ニコルマン・メドラーツマーの生涯については、Bärbel Kern u. Horst Kern: Madame Doctorin Schlözer. Ein Frauenleben in den Widersprüchen der Aufklärung, 2. Aufl., München, 1990 (他、関連史料一般については Lieselotte J. Eberhard: Dorothea Schlözer. Eine Sammlung von Bildern und historischen Texten, Lübeck, 1995) 破産訴訟については Wilhelm Ebel: Der literari-

sche Streit um den Konkurs Rodde vom Jahre 1810, in:
Zeitschrift d. Vereins f. Lübeckische Geschichte u. Alter-
tumskunde, Bd. 51, 1751, S. 29-49. 参考(シ)ル。ルカキ
ーリスの撰述に「Ida Hakemeyer: Bemühungen
um Frauenbildung in Göttingen 1747, Göttingen, 1949」を
参考(シ)ル。

(一橋大学専任講師)